
英国奇怪小旅行（イギリスミステリーツアー）

ちやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イギリスミステリーツアー
英国奇怪小旅行

【Nコード】

N0220V

【作者名】

ちやこ

【あらすじ】

商店街の福引でイギリスミステリーツアーのペアチケットを当てた麻衣。

SPR事務所に向かい、そのことを同僚の二人に話していると、年上の同僚であるリンが、チケットに書かれた「オリヴァー・デイヴィス」の名前を見つけた。

驚いたことに、イレギュラーもミステリーツアーのチケットを手に入れており、急遽、年末年始に掛けて行われるミステリーツアーに参加することになった。

イギリスに帰国中だったナルは、ミステリーツアーに参加するため
に一度日本に戻ってくる始末。だけど、ただの詐欺ではなさそうで
．．．。

(前書き)

英語は間違っていると思いますので、ご容赦下さい。
尚、ネタバレについては考慮しておりません。

それは、大学二年生の冬休み目前。商店街の福引で特賞を当てた。「大当たり〜！ イギリスミステリーツアー、ペアで一週間の旅〜！」

上司のナルは本国に帰っていて仕事は主に、安原さんとリンさんの三人でやっていた。リンさんも直に里帰りする予定になっていたから、あたしは今年の正月をどう過ごすかと考えてた矢先だった。「イギリスミステリーツアー〜！」

「はい。でも、旅行券だけもらってもしょうがないから、どうしようかなって思っ」

「ですが、ミステリーツアーなんでしたら、ちゃんと泊まる所もあるんじゃないんですか？」

「年末年始でSPRのバイトがない時は、短期の別のバイトを入れようと思ってたんです」

あたしと安原さんがそんな話をしていると、チケットを見ながら何だか考え込んでいるようだった。

「リンさん。どうしたんですか？」

「ここ、見て下さい」

リンさんはそう言いながらチケットのある部分を指差した。そこには、「超心理学者のオリヴァー・デイヴィスもオプザーバーとして同行」と、書かれていた。

「リンさん。ナル、このミステリーツアーに参加するんですか？」

「そんな話は聞いていませんが」

「じゃあ、以前あった偽者事件と同じってことですか」

「一応、事実確認をしてみます」

時差を確認してから電話を掛けたリンさんは、電話が終わると同時に首を横に振った。

「やはり、そのような話はないそうです」

「つまり……」

「偽者で決まりってことですね」

「……谷山さん。このツアーに参加してもらえませんか？ 仕事の

一環として、旅費などは全てSPRから出しますので」

「え、でも、それだったらリンさん達が参加した方が」

いいんじゃないかと言いつけた時、ブルーグレーの扉が開いた。

それは、ぼーさん達だった。

「いらっしゃい！ どうしたの？ みんな揃っちゃって」

「偶然、途中で会ったんだよ。俺、アイスコーヒーね」

「寒いんだから、偶にはホットにしない？」

「いいじゃんか。好きなのよ、アイスコーヒーが」

「あたくしは緑茶でお願いしますわ」

「アタシはミルクテイでお願いね」

「他のみんなは、いつも通りでいい？」

「お願いしますです」

「お願いします」

「すみません」

あたくしがそう言つて、三人のカップを持って立ち上がった時、真砂子が置いてあつたチケットに気付いた。

「あら。それ、どうしたんですの？」

「あ、福引で当たっただけだ」

真砂子は、自分の荷物の中から同じようなチケットを取り出した。

「真砂子まで何で、持ってたのよ！」

今度は綾子が驚いていた。それに、ぼーさんも。二人ともまったく同じチケットを取り出した。

あたくしは、慌ててお茶を淹れて戻った。

テーブルの上に四枚のチケット。

「あたくしは番組のスポンサーに頂いたんですわ」

「あたくしは福引」

「アタシも福引で当てたわ」

「俺は知り合いにもらった」

「ですけど、麻衣達は気付きました？ このチケットに書かれている内容を」

真砂子もオリヴァー・デイヴィスの記述に気付いたみたいだった。本人のいない所で、こんな事態になるとはナルも思っていないだろうな。

「とりあえず、どうしましょうか？」

「谷山さんは先ほど話したように、ツアーに参加して真偽のほどを確かめていただきたいのですが」

「でもこれ、ペアなんですよ。綾子にでもあげようかと思ってたぐらいだったし」

「何よ。あんた、自分で行けばいいじゃない」

「せやけど、渋谷さんはどうされはるんですやるか？」

SPRからの連絡があるのを待つことにして、リンさんが、ぼーさん、真砂子、綾子、ジョンに仕事として頼むかもしれないと伝えていた。

ぼーさん達が帰った後、事務所に電話が来た。

「はい。渋谷サイキック・リサーチです」

「麻衣か？」

「あれ？ ナル。どうしたの？」

『どうしたのじゃない。さっきリンから連絡があったらしいんだが、イギリスで行われるミステリーツアーだかに僕の偽者が参加するらしいな』

「あ、うん。福引で当たったチケットにそんなことが書いてあったの。それでね、そっちに連絡した後にぼーさん達が来てさ。驚いたことにぼーさんと綾子と真砂子が同じチケット持ってたんだよ」

『そうなのか？ ……リンはいるか？』

「機材室にいるよ。替わるね」

あたしは機材室にいるリンさんと呼んだ。リンさんがナルと話し終わった後、あたしと安原さんにこう言った。

「谷山さん、安原さん。ナルがあこのツアーに参加したいと言っています」

「……えっと、じゃあ、リンさんとナルの二人で参加したらどうかな」

「ここはやっぱり、谷山さんが渋谷さんと行かれるべきでしょう。チケットは四枚。ペア参加なんですから、どちらにしろ全員で行けますよ」

「安原さん。ペア参加ってことは、向こうでコンビ組むってことですよ。四六時中、ナルと一緒にいて、あの嫌味を聞けって言っんですか？」

「谷山さんなら大丈夫ですよ。リンさんもそう思いますよね？」

「そうですね。ナルも谷山さんには弱いですからね」

「リンさんまでそんなこと言うんですか。……とりあえず、ナルはツアーに参加するために、一度日本に帰って来るって言ってたんですよ？ そしたら、公正にくじ引きで決めましょう。どうせ、ミステリーツアーなんてゲームだろうし」

「分かりました」

リンさんは苦笑していた。ナルのことは好きだけど、四六時中一緒にいたいとは思わない。あの頭脳はお役立ちだけど、それだったら安原さんの方がまだマシなような気がした。

ナルは、ミステリーツアー出発の一週間前に帰って来た。

「あれから幾つかスポンサーの方から問い合わせがあった。機材を持ち込むことはできないが、一応調査と言う形になる。参加者のフリをして、決定的証拠を収めたい」

「それで、アタシ達も参加するのはいいけど、ペアの組み合わせはどうなるのよ？」

「……麻衣が、公正にくじ引きで決めたいと言ったそうだ」

ナルはそう言いながら、さつき、あたしに作らせたくじ引きを取り出した。割り箸に数字を書いただけシンプルな物だ。それを全員が一斉に掴んだ。

「お、一番だ」

「ぼくも一番です。のりお。一緒ですね」

「俺の相手は少年かよ」

「あたくしは二番ですわ」

「ボクも二番どす」

「ブラウンさんと一緒にすのね。よろしく願いしますわ」

「ボクの方こそ、お願いしますです」

「……僕は三番だな」

ナルの言葉にあたしは怨めしそくに割り箸を見た。堂々と書かれた三の数字。こう言う時の自分の勘を頼ってはいけないと心底思った。

「アタシは四番だわ」

「私も四番です」

「リンと一緒にね。よろしく」

「よろしく願います」

「つまり、僕の相手は麻衣と言うことだな」

誰だ。このクジを作ったのは！ などと思っただけど、提案したのも作ったのも自分だと気付いて、自分の愚かさを呪いたくなった。

一週間後。ミステリーツアーの参加者は、あたし達他に六組いて、合計で二十人ほどいた。みんなの注目がやっぱりと言うか何と言うか、真砂子とナルに集中していた。当然のことながら、その二人とそれぞれ一緒にいるあたしとジヨンは肩身の狭い思いをするわけ。

「真砂子とナルがペアだったら、あたしもジヨンも楽しかったのになあ」

「仕方ありませんよって。クジで決めたんだすから、これも神の導きどす」

「ま、でも本当に何かあった時は、真砂子にはジヨンで正解かもね。霊媒師とエクソシストだもん」

あたしがそう言うとジヨンは苦笑していた。三人掛けの椅子にナ

ル、あたし、ジョンが座り、真砂子は他の参加者達から隠れるために、すぐ後ろの席でリンさんとぼーさんの間に座っていた。背の高い二人に囲まれると、あたしと同じくらい背の低い真砂子の姿は通路からでは確認し辛くなるのだ。

「それにしても、ミステリーツアーってどんなことやるんだろうね？」

「ただの謎解きだろう」

本を読んでいたはずのナルが答えた。

「せやけど、イギリスは元々本場の心霊現場を回るツアーもあるんだ。せやから心霊調査協会が最初にできたと言われてはります」

「そうなの？」

「まあ、そうだな」

「……そう言えば、空港で他の子達が話してるのをちよこつと聞いたんだけど、ジョンのこと、本場の人間か、デイヴィス博士だっと思ってる人がいるみたい」

「まあ、ジョンは外見が外国人にしか見えないからな……」

「デイヴィス博士うちゅうのは、向こうでオプザーバー的な存在として参加するんやおまへんのですか？」

「どうだろうな。第一、ぼーさんやジョンのように心霊に携わったり、興味を持ったりしない限り、SPRの名前すら聞くことはない。なのに、噂話でも名前が出ると言うことは、それなりに心霊や超心理学に詳しい者がいると思うてもいいかもしれない」

「そう言われて見ればそうかもね。あたしも、ぼーさん達から聞くまでデイヴィス博士も心霊調査協会も知らなかったもん」

ミステリーツアーは年末から年始に掛けて一週間行われる。

十二月二十八日。イギリスに到着したあたし達は、ミステリーツアーの舞台となる古城に連れて行かれた。だけど、その城の門をくぐる時、なぜか身震いがした。

「どうした？」

「何か、寒気がしたの」

「……本物の時の麻衣の勘は当たるからな。気を付ける」
「うん……」

大広間に集められて、ミステリーツアーの概要が説明された。
「まず、最初にこのツアーの主催者であるマーク・ハワードさんからの挨拶です」

「皆さん。本日はイギリスミステリーツアーへの参加、ありがとうございますですね。このツアーの謎を最初に解いた人に素晴らしい商品待っていますね」

「続いて今回のオブザーバーであるデイヴィス博士です。彼はツアー参加者ではなく、皆さんが煮詰まった時のヒントを出してくれる方となっています」

そう言って紹介されたのは、四十代くらいの外国人のおじさんだった。ナルとは似ても似つかなかった。

「デイヴィス博士って、あのぐらいのイメージが強いんですかね？」
「そうかもしれないな」

後ろの方で、安原さんとぼーさんがそんなことを話していた。

言われてみれば、昔あった偽デイヴィス博士事件も偽者も四十代ぐらいのおじさんだった。あたしはすぐ横に立っているナルを見て、知らなかったら誰も、ナルを見てこの人物が超心理学の権威だなんて思う人間はいないだろうなと思った。

一日目に先ず、この城で起きたとされている怪奇事件の話が聞かされた後、ヒントが書いてある紙を渡された。

「では、各部屋に第二ヒントが書かれた物が置いてあります。各ペアで捜して下さいね」

ツアー参加のペア決めを男女分けなかったのは失敗だったと気付いた。なぜなら、ペアは男女関係なく同室だったからだ。他の参加者の男女ペアは恋人同士がほとんどなのか、気にもしていなかった。
「麻衣。今、真砂子達とも相談したんだけど、部屋を入れ替わってもらってから、あんたもアタシ達の部屋に来なさいよ」

「あ、うん」

綾子の提案に乗ろうかと思っていると、先に部屋に向かっていたはずのナルがいつの間にか戻って来ていた。

「第二ヒントを探し出すまでは部屋にいてもらう」

「そんなの、ナルがいればすぐじゃん」

「……お前はバカか。この城に最初に入った時に自分が言ったことを忘れたのか？」

「でも、気のせいかもしれないじゃん。真砂子もまだ、何も見てないんでしょ？」

「そうですね。これと言って特に害意のある物は見えていませんわ」

「とりあえず、リン。あの男の泊まっている部屋に盗聴機を仕掛けられるか？」

「やってみます」

「頼んだ。とりあえず、僕達は部屋に行くぞ」

あたしは仕方なく、ナルとあたしが泊まる部屋に向かった。

ナルは廊下で読んでいたヒントメモをテーブルの上に置くと、なぜか椅子の裏を調べ始めた。

「何やってんの？」

「第二ヒントはここにあるらしい」

「え！ もう分かったの！」

「ミステリーツアーって言うのは、素人のためのクイズ大会のようなものだからな」

「まあ、そうだよな。スタッフ使って脅す程度だよな」

「恐らくそんなものだろう」

それにしても、あたしはまだ、ヒントメモすら読んでいないと言うのにナルは解くのが早すぎる。それにしても、何だかんだ言ってもナルはこう言うのが好きだよな。

トントン

ドアをノックする音がして、開けてみるとなぜかみんなが揃っていた。

「あれ、どうしたの？ みんなして」

「ちよつとご相談があるんどす」

全員が集まる時に、ジョンが率先して切り出すのは珍しいと思つた。八人も揃うと部屋が狭く感じた。

「それで、皆さんお揃いでどうされたんですか？」

「実は、これなんどす」

そう言いながらジョンは、一枚の紙をテーブルの上に出した。それは、ヒントメモに似ていたけれど内容が英語で書かれていた。

「……僕達がもらった物と違うようだが」

「そうなんどす。ボクも始めは外国人ちゆうことで英文の物を寄越したんやと思つたんどすが、松崎さんらに聞いてみたら、内容が全然違うたんどす」

「それからちよつと、盗聴機を仕掛けてきたリンが戻って来たんで、あいつらの話を聞いたのよ。そしたらジョンをデイヴィス博士本人だと勘違いしているみたいなの」

「ぼーさん達は何で？」

「その盗聴機の内容を聞いている最中に俺らが訪ねたんだ。部屋に行つて、こう言うクイズ形式なことは少年に任せればいいと思つてベランダでタバコを吸つてたらさ、向かいの建物の方から悲鳴が聞こえたんだ。最初は、ツアーの余興かなと思つたんだがな。バツチリと火の玉が見えた。周囲を見ても仕掛けなんか何もなかったぜ」

「それで、とりあえず所長を訪ねる途中でリンさん達の部屋の前を通つたら、何だか大人数の声がするじゃありませんか。盗聴機を仕掛けたと仰つていたので、ぼく達もその内容をお聞きすることにしたんですよ」

「つまりはえつと……どう言うこと？」

「つまり、ここに幽霊が出ると言うのは本当らしいな。恐らく、オリヴァー・デイヴィスの名前を出せば、心靈調査協会が調査に来ると踏んでいたんだろう。そして、原さんと一緒に参加したジョンがデイヴィス博士本人だと勘違いされた。だから、ジョンのだけ英文で書かれているし、内容が違うんだろう」

「それって、何かあったらどうするの？」

「ミステリーと言うのは、推理ショーと怪奇現象の二種類がある。ミステリーと言う一言で推理ショーと勘違いしたただけだと言ってしまう、それだけで済んでしまう」

「ですけど、本物がいるとしたらどういたしますの？」

「ジョン。すまないがそのままデイヴィス博士本人のフリをして欲しい。恐らく、ジョンと原さんのペアに渡されるヒントメモは本物の心霊現象に関することだろう。リンはそのまま盗聴を続けてくれ。松崎さんは他の客の噂話を聞き出して下さい。ぼーさんと安原さんは一般の参加者に混じって、ツアーの謎解きをお願いします」

機材を置くことはないけれど、結局いつもの調査と同じような状態になってしまった。

あたしは、綾子と真砂子の部屋に泊めてもらって、真砂子と一緒にベッドに眠りに就いた。

ピチャン、ピチャン

水の音が聞こえた。お風呂場の水道がちゃんと締まってなかったのかな。などと思って、あたしは目を覚ました。こんな感覚、以前にも覚えがあった。

起き上がって、お風呂場の水道を調べたけれど水は出ていなかった。じゃあ、どこからこの音が聞こえるんだろう。

雨でも降って来たのかな。などと思って、あたしは冬の真夜中だと言うのにベランダに出た。不思議と寒さを感じなかった。

だけど、目の前の木を不意に見た時、あたしは目を大きく見開いた。

そこには、首を斬られて串刺しになった人の姿があった。

マーク！ と言うことだ！ また、人が殺されたぞ！

落ち着けオリヴァー。警察に捜査を頼んだから

警察がどう解決してくれると言うんだ？ 前日もその前も、事件は解決しなかった。私ですら疑いを掛けられて投獄されたことさえあったのに、私の留守中に事件が起きた。しかも、今回は人では不

可能な殺され方だ

……なら、SPRに調査を頼んだらどうだろう

SPRにか？ 私は事件の原因と解決を望んでいるんだが。調査団体に何ができる

いや。実は、お前と同姓同名の博士がいる話をしたことがあっただろう。彼なら解決できるかもしれない

だけど、ナルはその調査を断ったみたいだった。

……断られた

お前が、デイヴィス博士なら大丈夫だと言ったじゃないか！

彼なら解決できると言ったんだ。だが、調査にすら来てもらえないじゃ……。そっだ！

マークさんは、何かを思い付いたように立ち上がった。

友人から以前、日本にデイヴィス博士の偽者が出て、SPRでの調査に乗り出したと言う話を聞いたことがあるんだ

だから？

デイヴィス博士の偽者がいれば、SPRが潜入調査をしてくれるかもしれない

だが、向こうを騙して連れ来るにはどうしたらいいんだ？

ミステリーツアーを開こう。以前の偽者事件も日本であつたらしいし、イギリスよりもすぐにバレにくいだろう

……私としては、事件が解決してくれれば文句はない

決まりだな

あたしはそこで目を覚ました。同じベッドの上の真砂子も、隣のベッドの綾子もまだ眠っていた。

ナルへの報告と、部屋を入れ替わっていることがバレない内に部屋に戻った。部屋に行くと、ナルはすでに起きていた。

「ナルっていつ寝ているのか、謎だよな」

「朝から、そんなことを言いに来たのか？」

「いいえ。……夢、見たよ」

あたしがそう言つと、ナルは読んでいた本物のヒントの紙から目

を離した。

「あのオリヴァー・デイヴィスって人、本名なんだって。つまり、偽者じゃないけど、本物でもないってこと。それと、このお城、何度も殺人事件があったみたい。それをSPR、つまりナルに調査を依頼したんだけど断られたことがあるみたいだった」

「調査を？」

「うん。だから、以前あった偽者事件の調査のことを知って利用しようって考えたみたい。イギリスでミステリーツアーの参加者を集めると、直接SPRが来ちゃうから日本で集めたみたいだった」

「麻衣達が福引で手に入れたのは偶然か」

「多分ね。ただ、真砂子は偶然じゃないかも。ほら、あの時の事件って、予め真砂子だけ別に呼ばれてたでしょ。だから、その時真砂子とデイヴィス博士が繋がりを持ったって思ってるんじゃないかな」

「……その線はあるかもしれないな。それにしても厄介だな。麻衣の話だと、他のツアー客は完全な素人なんだな」

「真砂子やぼーさんみたいに、業界で知られている人に渡るようにしたみたいだけど、ただの推理クイズだと思って渡しちゃったんじゃないかな」

「その辺は、安原さんや松崎さんに調べてもらおう」

十二月二十九日。二日目。昨日見つけたヒントを元に、あたし達はツアーに参加しているフリをすることにした。あたしとナルのペアは、真砂子達と一緒に行動するために、同じ年と言うことで、ツアーで一緒になった真砂子とここで意気投合したと言うフリをすることにした。ちなみにナルは、心霊オタクと言う設定だ。

「まあ、あながち間違いないよね」

「……それよりも原さん。どうですか？」

「ええ。麻衣の言うとおりですわ。あの木の辺りに霊が見えますわ。ただ、建物の中よりも外の方が霊が多いですわ」

「何人ぐらい分かかりますか？」

「外だけでも二十名ほどいますわ。建物の中は全部回ったわけでは

ありませんから、正確な数は分かりませんわ」

「でしたら、ジヨンと見て来てもらえますか。僕達はぼーさん達の方を聞いてみます」

「分かりましたわ」

「ハイです」

真砂子とジヨンと別れて、熱心にゲームに参加しているフリをしているぼーさん達の所に向かった。意外とみんな、別ペアの動向が気になるのか、情報を収集するために話し掛けている様子を見掛けた。

「どうですか？」

「こちらが噂話を纏めた物です」

安原さんは小声でナルにメモを渡した。ナルはそれを受け取るとポケットに仕舞った。

「ところで、渋谷さんと谷山さんはどう言う関係のご参加と言ったことになってるんですか？ やっぱり恋人同士とかですか？」

「大学のサークルの先輩後輩です。上司は変ですからね」。綾子とリンさんなんか夫婦だっと思われてるみたい」

「あの二人がか？」

「でも、傑作だったのはぼーさんと安原さんかな。二人が時々掛け合い漫才やってるから、売れない漫才師だと思ってる人がいたよ。ほら、朝食の時にちやっつたでしょ。女性二人の参加者の人がそんなこと話してたの」

「のりお。ぼくとコンビ組みましようか？」

「俺は、漫才師になるつもりはない！」

「冗談はそれぐらいにして、原さんの見立てでもかなりの数の霊がいることが分かった。建物の中は、今、ジヨンと見てもらっているが、外だけでも二十はいるらしい」

「外だけで二十かよ」

「本来なら安原さんは危険なんだが……」

「ですが、一般の参加者もいらっしやることですし、当面は当初の

通り企画参加者のフリをしますよ。その方が検討違いのところを探
していてもおかしくありませんから」

「ところで、綾子とリンはどうしてるんだ？」

「リンには盗聴の方を頼んである」

「だから、綾子は一人で探し物してるんだよ。一日目でケンカし
たカップルのフリをしてるの」

ナルはジョンがもらったヒントメモをずっと読んでいた。

「そう言えば、ナルにしては珍しいね。ヒント、解けそうにないの」

「……意味は分かるんだが、どこに次があるのかが分からないんだ」
「何て書いてあるの？」

「春の訪れを示す額の中に、子供の声が聞こえる。 / 私は、闇から
来たもの。闇の中でのみ生きられるもの。 / 消された大いなる真実
を見出す者には、偉大なる称賛を与えよう。 / 真実に辿り着けぬ者
には、死が与えられる。 / 迷宮の中に私はいない。私から見えるの
は太陽のみ。 / 暗き闇の中にいて、私は太陽を常に見ている。(S
how the coming of spring in a
frame, hear a voice of childre
n. / I am came one from dark. Ca
n is alive one only in the dar
k. / Very the truth disappear
for one discover, praise do a
ward great. / Can't find one's
way for one to truth, have a de
ath award. / There's no one I a
m in the labyrinth. It's only
sun see that from my. / There's
in the dark, I am seeing sun
do constantly.)……と、言う内容だ」

「何だか、詩みたいだね」

「まあ、そうだな。春と言うタイトルの絵があつて、そこには子供

の絵も描かれていた。それに、不自然に塗り潰された絵もあった。だが、消された大いなる真実が、塗り潰された絵のことなのかは分からない」

あたしは英語の文を読ませてもらった。

「……そう言えば、高校の時にさ spring って春を指すけど、泉って意味もあるって聞いたんだけど、最初の絵そのものが間違ってるんじゃないかな」

「絵がか？」

「だから、春が訪れるんじゃないかって、泉だと思えば意味が変わるよね？ 春の絵には泉は描かれていなかったわけだからさ」

「まあ、その線も探してみるか」

泉の絵を建物内で見つけて、何気に裏を調べて見たけど何もなかった。だけど、子供の絵は描かれていた。

「麻衣の予想はハズレだな」

「……そうみたいです」

「そもそも the coming of spring で春の訪れを表すんだ」

「だったら言ってくればよかったのに」

ナルの性格を知っていてもムカつく。本物の謎解きはナルに任せ、あたしはとりあえずツアーの謎解きの方をすることにした。

日本でツアーを募集したこともあって、こちらは日本語で書かれていた。

第一ヒントは、木に奇妙な子供がいます。私はテーブルや机の相棒であり、あなたの相棒ではありませんが、あなたに使われるのはテーブルや机よりも多いでしょう。

ナルはその謎からイスを選び、イスの裏側に貼り付けられた第二ヒントを見つけた。

第二ヒントは、私は刻まれるものですが野菜ではありません。いつも規則正しく同じ方向にしか進みません。

これは、あたしでも分かる。答えは時計。その証拠に、各部屋に

は時計は一つずつしかなかった。

第三ヒントは、木の長いすに横たわる者は、ドン・キホーテである。三つの内、青が正解。

ここからは部屋の中に該当する物が見つからず、あたしは部屋の外に出た。広間や外に、色んな色の長いすはあるし、青色も存在するんだけど、みんな同じことを考えているらしく青いベンチを見ている人達がいた。その中に綾子の姿があった。

「綾子！」

「あら。麻衣、一人なの？」

「ナルは本物のヒントと睨めっこ中です。リンさんはお仕事中心だよ」

「そーよ。それよか、第三ヒント分かった？」

「まだ。今、探してるとこ。綾子は？」

「アタシも同じよ。みんな、青い長いす探してるみたい。……それよりも、麻衣。あんた、一人でフラフラ歩くんじゃないわよ」

「何で？ 綾子だって一人じゃん。今のところ危険な感じしないけど」

「……危険って言うのはね」

綾子が言い掛けた時、ツアー参加者らしい二人組みの男の人達に
出くわした。

「あれ〜。君達、確か、それぞれ男の人と参加してた子達だよね？
もしかして、彼氏に振られちゃったのかな〜」

「何なら、僕達と一緒に参加しない？」

「結構よ」

「そんなこと言わないでさ〜」

あたしは綾子に腕を引っ張られて、とりあえず大広間まで出た。
「分かったでしょ。男同士で参加してるのもいるから、ああ言うナンパ男もいるのよ」

「……肝に銘じておきます。それよりも、大広間まで出ちゃってどうすんの？ こっちに長いすなんかなかったはずだけど」

「あれ〜。松崎さんと谷山さんじゃないですか？　こんな所でどうしたんですか？」

そう言われて振り向くと、安原さんとぼーさんがいた。

「第三ヒントを頼りに、第四ヒントを探してたんです」

「ああ、なるほど。それで皆さん、部屋の外にいらしたんですね」

「安原君達は見つけたって言うの？」

「おう。少年がばっちし第四ヒントを見つけたぜ」

「ヒントをお教えしましょうか？」

安原さんが意地悪く言ったけど、結局は教えてもらえた。第四のヒントは、部屋の中にあるらしい。

「ドン・キホーテが乗っているのは長いすじゃなくて馬なんです。

それと、中国や日本じゃ白馬のことを青馬って言うんですよ」

「そうなの？」

「そう言えば、そうだったわね」

「じゃあ、がんばって下さいね」

「そう言や、さっき真砂子とジョンに会ったぜ。六時過ぎに一度集まりたいって言った」

六時過ぎと言われて、あたしと綾子は部屋に戻る前にナルとリンさんに食事を持って行くことにした。食事は基本的にビュッフェ方式で、各自自由に食事を取ることになっていた。

「そう言えば、今回って、リンさんは精進潔斎してるのかな？」

「どうなのかしらね。一応、サラダだけのとそうでない物を持って行けばいいでしょ。余ったら、みんなが来た時に食べてもらえばいいじゃない」

「そうだね」

部屋に戻って、とりあえずナルに食事をさせたんだけど、ナルってばサラダしか食べなかつた。

「……せっかく持って来たんだから、もう少し食べてよ」

「余計なお世話だ」

「……じゃあ、お世話されないように行動して下さい。所長様。食

事と睡眠ぐらい、言われなくても取れるようになってもらいたいものですね」

「僕は、麻衣に世話されているつもりはない」

イギリスまで来て、ナルと言い争いするつもりはない。

「そう言えば、さつき安原さんとぼーさんに会ってさ、ジョンと真砂子に会ったら、六時過ぎに報告も兼ねて集まりたいって」

「そうか。……ところで、ヒントを求めて外に出たはずだが、その報告のために戻って来たのか？」

「違います。ちょっとズルだけど、安原さんに聞いたの。そしたら、第四ヒントまではこの部屋にあるんだって」

とりあえず、みんなが来るまでに見つけようと思った。安原さんのヒントから考えると、第三ヒントが表しているのは、青い長いすではなく、白い馬ってことになる。三つってことは、この部屋に馬、もしくは馬を現すものが三種類あるってこと。辺りを見回っていて、チエストの上にチエス版を発見した。

「……チエスって、確か馬があっただけ……」

何気に白いチエスの馬の底を見てみると、文字が書かれていた。

片方にはR。もう一つの駒を引っくり返すとこっちはDの文字が。

「ねえナル。RとDって何だと思う？」

「RとD？ そんな略語は存在しないが」

ナルも少し考えてくれるつもりらしい。チエス版を何気に見ていると、チエス版に黒い染みがあるのを見つけた。

「麻衣。RとDじゃなくて、DとRじゃないのか？ ……何をしてくれる？」

「ナル……。ここ、見て」

向きを逆にしたり、黒く塗り潰して巧妙に隠してあったけど、それは明らかに血の染みだと思った。

「……血の染みだな」

「もしかして、この部屋も殺人現場ってこと？」

「それは分からない。ツアーのためにわざと付けたものなのか、そ

れとも、本物なのか」

「……先に言っておくけど、サイコメトリしちゃダメだからね。本物だったら危ないし、偽物だったらする必要ないもん。どっちにするダメだけどね」

あたしがそう言つと、ナルは溜め息を吐いた。

「ところで、さっき言い掛けたヒントなんだけど」

「ああ。あれはRとDじゃなくて、DとRだと思う。ドクターを現すんだ」

ドクターってことは医者かあ。などと考えていたら、真砂子達が来た。

「とりあえず、回れる範囲だけでも見てまいりましたわ」

「それで、どうでしたか？」

「一度に亡くなったわけではありませんけど、かなりの方が亡くなられていますわ」

「それって、ヴラド事件の時みたいに？」

「そうですね。あの時と違うのは、死んだ場所がバラバラと言うことですわ。自分がどうして殺されたのか分からないまま、この城の中を漂っていますわ」

「渋谷さん。実はどすね、別館の方には入れませんでしたので、庭の方を回ったんですが、今月に入ってからメイドさんが亡くならはれはったようどす」

「ぼくもその噂聞きましたよ。ビュッフエのスタッフに聞き出したんですけど、主に狙われるのがメイドさんらしいんですけど、中には男性や中高年、子供が亡くなったこともあるみたいなんです。ツアーに使われているので、そのことは絶対に秘密にしてくれと言われました」

「……正確な情報を知りたいな。……ジョン。彼らにコンタクトを取ってくれないか。本物のフリをして、詳しい話を聞き出してもらいたい」

「分かりましたどす」

とりあえずジョンが話を引き出すのを聞くために、リンさん達の部屋に移動した。部屋に入って驚いたのは、どうやって持ち込んだんだろうと言う機材だった。そりゃあ、いつもよりはずっと少ないけど。

「……リンさんって、ずっとここにお籠りになられているんですね」

「まあ、そうですね」

「何だか、今回は、所長よりもリンさんの方が不健康ですね」

安原さんの的確な表現に、あたし、ぼーさん、綾子はちよっと笑ってしまった。

「それよりも、リン」

「分かりました」

リンさんがスイッチを入れると、ちょうど、真砂子とジョンが訪ねた時らしかった。

『あの、ちよつとよろしいですかしら』

真砂子の声だ。真砂子は自分が日本の霊媒師であることを明かし、この城に無数の幽霊がいることについて尋ねた。

『あなたが日本の有名な霊媒師だと言う話は、ツアーコンダクターから聞いてます』

『……本当は秘密ですけど、こちらが本物のデイヴィス博士ですよ。あなた方が、偽者だと言うことも分かっていますわ』

『完全な偽者と言うわけではない。彼は、偶々同名だった言うだけで、それを利用してもらっただけ。名前を語れば、本物、もしくは本物を知るSPRの職員が調査に来ると思ってた』

同名同名とは言え、博士でもないのに博士と名乗ったり紹介した時点から、それは詐欺や嘘になります。ボクは日本の知り合いである原さんからこのツアーのことを聞いて、このツアーに参加することになりました。なぜ、このようなまるでっこしいことをしたのか、お聞きしてもいいですか？

英語の部分は、安原さんが通訳してくれた。当たり前だけど、ジ

ジョンは英語で関西弁は喋らないって考えると、ジョンのイメージがちょっと変わってくるな。

分かりました。この城では昔から人が殺されるのです。数百年も続くことで、原因が未だに不明なのです。城を壊そうとすると事故が起きたり、放火を装って火を放つても、突然豪雨が降って鎮火してしまったりと

この城の持ち主は、先祖代々同じ一族なのですか？

いえ。私の祖父がこの城を面白半分買い取りました。普通に生活していれば殺されることはないようなのです。実際、

父の前の持ち主は、ここで生まれ育ち、八十年生きたそうです

歴代の城主で亡くなった方はいますか？

います。私で二十人ほどになりますが、その内、八人ほどがこの城の中で殺されたそうです。当時は犯人が捕まったことになっていきますが、それでも殺人事件は止まらなかつたそうです。……デイヴィス博士！ あなたの名前を語ったことは謝ります！ ですから、この原因を解決していただきたいのです

……ツアーの調査に来ただけなので、ここでこれ以上のことはできません
そう……ですよね

ここで、会話は途切れた。後は、依頼を受けるかどうかは、“本物”のデイヴィス博士の判断に任せるしかない。みんなの注目がナル坊に集まった。

「ナル坊。どうすんだ？」

「……このままツアーが何事もなく終わればいいが、そうでなかったら……」

「つまり、何かあった時には調査に乗り出すってことですか？」

「まあ、何かあればですが」

とりあえず、あたしが寝て、それ以上の情報収集することになった。ツアー中では安原さんも情報収集するわけにはいかないから。

眠りやすいようにと、イスではなくベッドの上に座り、あたしは

みんなが見守る中、トランス状態に入った。

一瞬、外に出たのかと思った。それぐらい眩しく感じた。

よく見ると、ヒマワリで埋め尽くされていた。部屋中、ヒマワリだらけ。驚いたことに壁の絵もヒマワリ。なのに、この部屋には窓が一つもなかった。

「何……この部屋」

あたしが部屋の中を不思議そうに見ていると、声が聞こえた。

メリッサお嬢様はもう、長くないだろうね

太陽に当たると火傷のようになるなんて奇病、世間には言えないからね

見たかい？ お嬢様の部屋。太陽に憧れて、ヒマワリだらけになっちまった

英語でよく分からなかったけど、メリッサって名前と、わずかな単語だけ分かった。

その部屋をジッと見ていたら、後ろから肩を叩かれた。振り向くと、そこにはいつも見慣れた顔と同じ顔があった。

「ジーン」

あたしが名前を呼ぶと、彼は笑った。

「久しぶりだね」

「久しぶり。まさか、イギリスに来ても会えるとは思わなかったよ」

「僕はナルがツアーに参加してるとは思わなかったけどね」

「ところで、あのヒマワリだらけの部屋って何なの？」

「……あの部屋が秘密そのものなんだよ。この部屋に迷い込んだ者が殺されたんだ」

「どう言うこと？」

「アレルギーって分かるよね？ その中でも日光に当たると火傷したみたいになる病気があって、メリッサってお嬢様はそう言う病気だったんだ。だから、生涯幽閉されて、拳銃に太陽に当たれないせいで魔女じゃないかって噂されたんだ」

「じゃあ、あの大量のヒマワリって、太陽に憧れてってことなの」

「うん。太陽に憧れる反面、彼女は普通に太陽に当たることができ
る周りの人間を恨むようになったんだよ。若くして亡くなった彼女は、
幽霊になっても昼間は部屋から出ることはできない。だから、
太陽の出ている時間にこの部屋に入った者は、自分を殺しに来たと
思ってるんだ」

「……ジーン。どうすればいいの？」

「今回は少し危険かもしれない。幽霊が活性化する夜の方が逆に安
全なんだ。だから日中、この部屋に絶対に入らないようにね。それ
と、彼女は本当は本物の太陽に憧れている」

「そうなの？」

「それと、彼女の望みは、ヒントに隠されている。絵もそうだけど、
額も重要だよ」

トランスから目が覚めると、すでに外は真つ暗になっていた。

「起きたか？」

「……今、何時？」

「夜中の一時だ」

トランス始めたのが七時ぐらいだったから、六時間も寝てたのか。
いつもの調査だったら、ちょうど仮眠したぐらいだけど。綾子達は
普通に寝ているだろうな。部屋を移動するかどうしようか迷ってい
たら、ナルがバスタオルを投げてよこした。

「シャワーを浴びて、頭をすっきりさせて来い。それから報告」

夜中に目覚めてボーっとしているのは事実なので、言われるまま
にシャワーを浴びた。

「それで、何を見たんだ？」

あたしはヒマワリだらけの部屋と、太陽アレルギーの少女の話を
した。

「それで、その部屋はこの城のどこにあるんですか？」

「多分、別館の中だと思う。向こうに入ったことがないから、正確
な位置は分からないけど。それとね。ヒントの額の中って、絵もそ
うなんだけど、額縁にもヒントが隠されてるんだって」

「額縁に？」

「うん」

「……夜が明けてから調べよう。麻衣の話だと、そのメリッサに近付くのは夜の方が安全らしいが、基本的に普通の状態で夜行動するのは危険だからな」

「そうだね」

綾子と真砂子が寝ている部屋に移動しようとしたら、ベッドが二つあるんだから、ここで寝れば良いと言われた。

「僕が麻衣を襲つても？」

「そうですね。ナルは研究以外には興味ないんですよ」

あたしは不貞腐れて眠った。好きな人と同じ部屋だなんてドキドキして眠れないかな。なんて思ってたけど、あたしは夢も見ずにぐっすりと眠ってしまった。

十二月三十日。三日目。

「谷山さん。起きて下さい」

安原さんの声が聞こえた。鼻を掴まれているのだと気付いて、慌てて目を覚ますと、鼻を掴んでいたのはあるうことかナルだった。

「何するかな」

「起きないお前が悪い」

「正式な調査中じゃないんだから、別にいいじゃん」

完全なプライベートではないが、かと言って、仕事中でもない。

「ところで安原さん、どうしたんですか？」

「それがですね。事件があったそうなんですよ」

「事件ですか？」

「所長にその報告に来たら、谷山さんが同じ部屋でお眠りになっていたと言っわけです。昨夜は同じ部屋に寝泊りしたんですね」

「トランス状態から目が覚めたのが夜中の一時だったんです。そして、ナルが綾子と真砂子に迷惑だからって」

「なるほど。そうでしたか」

「麻衣。リンの部屋に移動する。安原さんの話を聞いたら、昨夜の

話を確かめに行く」

「分かりました」

とりあえず顔を洗って歯を磨いた。脱衣所で服を着替えてから、ナルや安原さんとリンさん達の部屋に向かった。

「じゃあ、今朝、別館で人が殺されたって言うの？」

「何だか騒がしいんで、カマ掛けて聞いてみたら早朝に人が死んでいるのが発見されたそうなんです。ツアー中と言うこともありまして、知り合いの警察にこっそりと来てもらって検分していただいたようですね」

「死因は何でしたか？」

「心臓発作だそうです。ご老人だったそうなのですが、心臓はいたって丈夫で、ご健康そのものの方だそうです」

「なのに、心臓発作で亡くなるほど衝撃的なものを見たってことか」
真砂子が霊視した殺され方の中じゃ、それほどインパクトは強くなかった。

その後、朝食を食べに行くことにしたのだが、不意にツアーのヒントのことを思い出して、あたしは安原さんに尋ねた。

「安原さん。このツアーってお医者さんなんかいませんよね？」

「医者ですか？ ツアーには同行していらっしやいませんが、なぜ、そのようなことを？」

「昨日教えてもらったヒントを頼りにチェスの駒を引っくり返したら、DとRって書いてあったんです。そしたら、ナルがドクターのことじゃないかって言ったから」

「ああ、なるほど。それで谷山さんはドクター＝医者だと思っただけですね」

「違うんですか？」

「ドクターと言うのは、博士も表すんです。ですから、そのドクターと言うのは今回のオブザーバーであるデイヴィス博士に次のヒントを貰えって言うヒントなんですよ」

安原さんにそう言われて、あたしは感心してしまった。あたしは

デイヴィス博士を日本語でしか知らないから、まさか、英語で言うとドクター・デイヴィスになるなんて思いもしなかった。

「納得しましたか？」

「しました。……じゃあ、安原さん達は第五ヒントも手に入れたんですね」

「ただ、ここからちよつと難しいと言うか、ペアごとに内容がバラバラになるみたいですね」

未だに長いすを調べている参加者は多いらしく、食堂に行ったらそう言う人達がいた。三日目ともなると、それなりに仲良くなった人達がいるみたいだった。昨日あたしと綾子に声を掛けて来た男性の二人組みも、別の女性二人組みの参加者と仲良くなった。

リンさんは、表立ってナルに食事を強制させることができないので、ナルとペアを組んでいるあたしが、全面的にナルの世話をすることになる。

「ナルってさ、いつもリンさんに食事作ってもらってるの？」

「なぜ？」

「だって、ナルっていつもリンさんにお世話されてるし、用意しないと食事しないんだもん」

「麻衣の言うとおりですわね。あたくしも、ナルが料理するなんて想像できませんわ」

「昨日の話って結局どうなったの？」

「保留中だ。ジョンが代わりに話を聞いただけで、依頼を引き受けるかどうかは別だな」

「渋谷さん。ボクと原さんは、どうしはっいたらいいですか？」

「そうですね……。とりあえず今日はこのままツアーに参加しているフリをして下さい。今朝の事件を考えたら、向こうからコンタクトを取ってくる可能性があります。レコーダーを持ってもらえますか」

ナルはそう言うと、ジョンにレコーダーを渡した。食事を終えると、四人で春の絵を調べることにした。額縁を調べたけれど、特に

何か描かれてるわけじゃ……。

「あ！ 見て、ここ」

「ヒマワリみたいですね」

「子供の絵の中に本を持つてる子がいますわね」

「Endymionと書かれているな」

「エンデュミオン？」

「ギリシャ神話に出てくる王の名前だ。月の女神であるセレネの恋人と言われていて、永遠に若く美しいままだったと言う話がある」

「ヒマワリは分かるけど、そのエンデュミオンは何で？」

「恐らく、夜の世界しか知らない自分を月の女神セレネに例えたんだろう。麻衣の見た人物がいつ頃の人間かは分からないが、ギリシャ神話はヨーロッパの中では最も古い神話だからな。キリスト教が普及しても、物語としては人気は昔からあったんだ」

ナルは段々この事件に興味を持っている以上、本格的な調査をするわけにはいかないみたいだった。近付こうとした時、真砂子に腕を引っ張られた。

解決するかどうかは別にして、偽デイヴィス博士に第五ヒントを貰いに行くことにした。

「麻衣ったら、結局参加していらっしやるんですね」

「本物の謎解きはナルに任せて、あたしはゲームを楽しんでるだけですよ」

「それにしても部屋にいないなんて、どこに行ったんだらうね」。

あ、あの人に聞いてみよう」

金髪の若い女の人の後姿が見えた。ベンチに座っているみたいだったけど、参加者の中には外国人の女の人はいなかったから、きっとこのお城の人かスタッフだろうと思った。

「麻衣！」

近付こうとした時、真砂子に腕を引っ張られた。

「どうしたの、真砂子？」

「原さん。どうかしましたか？」

「……亡くなっていますわ」

あたしと真砂子は、ナルとジョンが確かめている間、少し離れた所でその様子を見ていた。

「首を鋭利な刃物で斬られてはりました」

「正確な時間は分からないが、硬直が始まっているな」

「……ツアーは中止ってこと？」

「安原さんが今朝、老人が亡くなったと言っていたな。それでもツアー客には何も知らせないのだから、このまま隠すかもしれないな」
マークさん達に知らせると、他の参加者に内緒にしておいて欲しいと言われた。あたしはとりあえず、第五ヒントが書かれた紙をもらった。

「明日はNew Year's Eveですね。ですから、明日の夜はいつもとちょっと違う夜になります。最後のヒントに必要な物がもらえますね」

「パーティのようなことをするってことですか？」

「まあ、似たようなものですね。衣装はこちらで用意してありますから、安心して下さい」

その言葉を聞いて、ナルは少しムツツリとしていた。

遺体を発見したことはぼーさん達には伝えた。あたしはとりあえず部屋で、ナルとは別に第五ヒントと睨めっこしていた。

第五ヒントは、なぜか大きな古時計の歌詞が書かれていた。柱時計はお城のそこらじゅうにあって、どれがそうなのか分からなかった。

十二月三十一日。四日目。大きな古時計がさっぱり分からなくてお城の中の柱時計を片っ端から調べていると、スタッフの一人が呼びに来た。何でも女性は、ドレスに着替えるので来て欲しいのとのことだった。

大広間で本を読んでいるナルをジョンに任せて、あたしと真砂子は別室に向かった。参加者のためにそろえられたのであろう衣装が色々あった。最初の時に服のサイズを書くことがあったけど、この

せいだったのかとみんな納得していた。

ツアー参加者の女性はあだし達三人の他、四人いた。一組は女性同士の参加。一組はどうやら恋人同士。もう一組は兄妹みたい。

普段着たこともないドレスを着せられて、ちよつと変な気分。

「真砂子って、ドレス姿も似合うよね」

「当然ですわ。ですけど、麻衣も似合ってますわ」

「貸し衣装つてのが残念だけど、まあ、こんなもんよね」

あたと真砂子はミニのスカートなのに対して、綾子のはロングでスリットが入っていた。

広間に行くと、ぼーさん、安原さん、ジョン、リンさんはそれぞれ褒めてくれたけど、ナルは案の定、

「馬子にも衣装だな」

と、言った。

「……そんなことわざ、いつ覚えたのさ」

「これでも日々努力していますので」

日本にちなんでお願いごとをしようと言うことになったので、ナルの横で思いつきこう言ってやった。

「来年は、上司の口の悪さが治りますように」

「じゃあ、粗忽者の部下の暴走が起きませんように」

ああ言えばこう言う。

「そう言えば、ナルがこう言うパーティに参加するのって珍しいね」

「ただのツアー参加者のフリをしているからな。参加しないわけにはいかないだろう」

「なるほどね」

カウントダウン一分前に、電気が全部消されて真っ暗になった。

こう言う新年の向かい方をするのは、生まれて初めてだったからドキドキしていると、不意に腕を引っ張られた。

後頭部を掴まれてキスをされた。押し付けるようなキスをされて、暗闇の中で目が合った。黒い双眸があたしを見ていた。新年が明けると寸前に唇が離れた。

「A Happy New Year!!!」

お城の外に花火が何発か上がった。けどあたしは、たった今さっきのことで頭がいっぱいだった。

暗闇の中だったけど、あれは確かにナルだった。

「では、最後のヒントに必要な物です。今日のパーティーに出てきた物がヒントですよ」

その言葉に何人かが文句を言っていた。だけど、そんな状態をあたしは遠くで眺めているような気分だった。

シャンパンに少し酔ったみたいで、みんなから離れてバルコニーに出た。

「麻衣」

一人になりたかったのに、驚いたことにナルが追い駆けて来た。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃない。一人でフラフラするな」

「大丈夫だよ。夜だし」

「メリツサは平気でも、他の幽霊だっているんだ」

「……そうだね」

あたしはバルコニーに背を預けて、ナルの方を向いた。

「ねえ、何であんなことしたの？」

「やったのは僕じゃない」

あたしはナルの言葉の意味が分からなかった。

「……麻衣にキスしたのはジーンだ。……ジーンが僕の体を使った」

「言い訳にしては、ちょっと……」

「大晦日のキスはあいつに譲った。だから、新年最初のキスは僕がもらっ」

ナルの顔が近付いてきた。あたしはそつと目を閉じた。さっきとは違う、貪るようなキス。ナルの舌があたしの口内に入ってきた。

外はすごく寒いのに、あたしの体はすごく熱かった。

ナルがあたしのことをどう思っているかなんて、聞いちゃいけない

い気がした。だけど、そのまま二人で抜け出して部屋に戻った。

生まれて初めて着たドレスを脱がされて、全裸でベッドに寝かされた。

「麻衣のファーストキスはジーンに譲った。だから、麻衣を最初に抱くのは僕でありたい」

みんながパーティーで盛り上がっている最中、あたしは生まれて初めて男の人に抱かれた。ナルの白い肌が、暗闇の中で薄っすらと見えた。

あたしの濡れきった股間に、ナル自身が入り込んできた。激痛に耐えながらも、ナルはどんどん侵入してくる。

「痛……」

「無理をさせたか？」

「ううん。そんなことない……」

「そうか」

ナルの笑顔。ジーンとは違う。小さく嬉しそうに笑うナルの笑顔に、あたしは改めてトキメいてしまった。きっとナルの気紛れなのかもしれない。でも、今だけはあたしが誰よりもナルの傍にいる。

ナルに抱かれている自分が信じられなかった。ううん。あたしを抱くナルの方が夢みたいだった。でも、痛みが夢ではないと信じさせてくれた。

一月一日。五日目。あたしはいつもと違う朝を迎えた。すぐ隣にナルの寝顔があった。昨夜のことを思い出して、ちよっと恥ずかしくなった。

ナルの目が薄っすらと開いた。

「……明けましておめでとう。ナル」

「おめでとう。麻衣」

挨拶だけして起き上がろうとしたら、ナルに引っ張られて抱き締められてキスされた。

あたし達が抜け出したことに気付かれたかと思ったら、ほとんどの人が昨夜のパーティーで二日酔いになっているみたいだった。ぼー

さんと綾子が特にひどいらしく、リンさんも相当飲まされたみたいだった。

「谷山さん。昨夜は所長とどちらにいらしたんですか？」

後ろから声を掛けられて、あたしは慌ててしまった。だけど、ナルが安原さんにこう言った。

「安原さん。興味本位はほどほどにした方がいいですよ」

「……そうですね」

安原さんは苦笑すると、そのまま行ってしまった。

新年一日目。あたしは第五ヒントについて考え、柱時計を調べていた。ナルは相変わらず手伝ってくれないけれど、なぜか一緒に回ってくれていた。

玄関にあった少し大きめ柱時計を見てみると、ちょうど十二時になった。

「あれ？」

違和感を感じた。

「あ！ハトが出て来ないんだ」

ハトが出てくる所を開けて調べると、紙が挟まっていた。だけど、その紙を取り出すと、所々黒ずんでいた。

「……血の染みだな」

「これが次のヒントなの？」

「違っだろうな。ミステリーツアーでもここまでする必要はない。それに、文章が英文で書かれている」

「何て書いてあるの？」

「He is murdered. My robbed on the whole. That a man I'm unforgivable. ……彼は私を殺した。私の全てを奪った。あの男を私は許せない」

「誰かが殺される時にここに手紙を入れたってこと？」

「そっだろうな。……この文章を書いた人間がメリツサの霊に殺されたのだとしたら、彼と言うのは変だ」

「じゃあ、メリッサが原因以外の殺人事件があつたってこと？」

「……それは分からないが。これを書いたのはメリッサ本人かもしれない可能性もある。僕の記憶が確かなら、昨日はちゃんとハトは出ていた。誰かが入れたか、偶々今日は出て来なかつたかだな」

第六のヒントは結局ナルが見つ付けてくれて、同じ柱時計の後ろに貼り付けられていた。

ツアーが終了するのが明後日。あたしは、ナルがこの調査を受けるのかどうか気になっていた。

「ナル。結局、あの依頼って受けるの？」

「不本意ながらここまで調べて途中で投げ出すのもな。とりあえず、ツアーが終了してからだ。調べて分かった内容は英国SPRの方に伝えるか、改めて依頼してもらうかだな」

「でも、それだとジョンがナルの身代わりになっちゃわない？ あたし達の顔もバレてるし」

「麻衣の言うとおりだな。本部の方に任せるのが一番だろうな」
ナルはちよつと不本意そうだった。

第六のヒントは、空を明るく染める炎を見た。その炎を見た日はいつのことか。それは蒟蒻、胡麻、柚子に共通する言葉。

「空を明るく染めるって言ったら花火……。つまり大晦日だよな。コンニャク、ゴマ、ゆず……。って言ったら味噌……。あ！ ミソだ」
自分でそう言って、ミソが答えだからって、次に何を調べればいいのか分からなくなった。あたしが考え込んでいると、珍しくリンさんが来た。

「あれ？ リンさん。どうしたんですか？」

「ナル、谷山さん。こちらにいたんですか。本部の方から連絡がありました」

「本部の方から？」

まだかさんではなく、本部と言われて不思議な感じがしたけど、リンさん達の部屋に向かう間、リンさんに聞いたらイギリスではクリスマスは重要だけど、正月は重要じゃないって教えてくれた。

ナルは電話に出ると、相手と話し始めた。英語だったので内容はよく分からないけど、どうも、ここでの事件をSPRの方に依頼したみたい。

電話を切り終わったナルは考え込んでいた。

「リン。ぼーさん達を呼んでくれ」

リンさんの部屋に全員が集まり、ナルはこう言った。

「依頼を受けることになった」

「……ツアーは終了ってことか？」

「いや。とりあえずツアー客に支障がないようなら、このまま続けたいそうさ。だから、ツアーが終了しだい調査を開始する」

「だけど、相手はジョンが本物のデイヴィス博士だと思っているんでしょ？ どうすんのよ」

「そうだよ。あたし達だって、ツアー参加者なんだよ」

「実は調査員だったと言ってしまったえば済む。それに、麻衣と僕は最初から不自然なほど原さんとジョンと一緒にいたからな。名前は今更名乗る必要はないだろう」

ツアー終了と同時に調査と言う話になって、ジョンがツアーの主催者であるマークさんに話をするようになった。

一月二日。六日目。とりあえずあたしはミソの謎が解けずに、食堂の人にミソについて聞くと、驚いたことに封筒を渡された。

「おめでとう。あなたで三組目よ」

手紙には数字が書かれたカードが入っていた。

「あの、一番で通過した人ってメガネ掛けた学生風の人と長身で茶髪の人でしたか？」

「そうよ。よく分かるわね。彼らは、昨日の朝一番にここに来たわさすが、安原さん。と、あたしは思わず感心してしまった。

三番の数字を見て、正解を導き出した順番に商品が決まっているんだと思った。

「ナル。謎解き終了したよ！」

ツアーの方が気になって、本格的な調査に関してはほとんど調べ

ていなかったあたしは、謎解きが終了したことをナルに伝えに部屋に戻った。結局、昨夜はバレないように綾子や真砂子達と一緒に部屋で寝た。

部屋を開けると、ナルがちょうど着替えている最中だった。

「と、ごめんなさい」

「部屋に入る時はノックをして欲しいものですね」

嫌味の返事をするのをやめて、ナルが中から着替えが終わったことを伝えると、改めて部屋に入り、ツアーの謎解きが終了したことを伝えた。

「そうか。……それにしても、僕の裸に照れるなんて今更だと思っ
が？」

ナルの指があたしの顔の輪郭をなぞった。

「恥ずかしいものは、恥ずかしいんです」

「……今日の内にこちらのSPRのスタツフが機材を持って来て設置してくれる。僕らは二日後に合流することになった」

「そうなんだ……」

何だか、ナルの手が不穏な動きをしていた。

「な、ナル。まだ、昼間なんですけど」

「そうだな。……昨夜はよくも、僕を一人にさせてくれたな」

「だ、だって、綾子達にバレるとうるさいし」

「麻衣は、バレるのが嫌なのか？」

「そんなことはないけど……」

壁に押し付けられたままナルにキスをされた。服を全部脱がされることはなかったけど、二度目は立ったままイカされてしまった。

誰か来るんじゃないかと思うと、余計に股間が疼いた。その様子に気付いたのか、ナルがこう言った。

「リン達は機材の設置を手伝いに行っている」

「……知っていて黙ってたな」

「まあ、そうだな。気になって、気持ちが入らないようなので、教えて差し上げただけです」

ナルはそう言いながら、あたしを壁に押し付けながらさらに、ナル自身をあたしに押し込んだ。大晦日の夜よりもずっとナルを近くに感じた。

ナルが首筋にキスをした。と、思ったら少し強く吸われた。

「何するの！」

「麻衣に僕の所有物の証を残しただけだ」

その後で鏡を見たら、しっかりと首筋に痕が残っていた。あたしはとりあえず持って来ていたハイネックのセーターを着た。

一月三日。七日目、最終日。綾子はツアー参加者十組中、六番目でどうにか商品をゲットできたらしい。初めから違うヒントを渡されていたジョンと真砂子の組と、ナンパばかりしていた男性二人組みが、謎解きをクリアできなかつたみたいだった。

最後のカードの数字ごとに商品が渡された。あたしがもらったのは、ペアのシャンパングラスだった。

「あら、可愛いじゃない」

「お酒飲める歳だし、いつか使ってみたいな」

「そーね。そうしなさい」

「ですけど、飲みすぎには注意ですよ」

日本のツアーコンダクターにそれぞれ、別の理由でイギリスに残ることを伝えて、あたし達は他のツアー参加者の乗るバスを見送った。

「そう言えば、安原さんとぼーさんはどう言う理由で残ったの？」

「俺達か？ ロック歌手のコンサートがあるから、それに行くためって答えた」

「リンさん達は？」

「こちらに実家があるので……」

「そう言うあんた達は？」

「デイヴィス博士と親しくなったから、SPRRに案内してくれるって話になったって答えた。一応、あっちのオリヴァーさんにも話は通してあるんだよ」

あたし達はそれから別館に移動した。今まで泊まっていたお城とは比べ物にならないほど、嫌な感じがした。

「麻衣。何か感じるか？」

「……すごく嫌な感じがする。何だか分からないけど、もしかしたら、殺人犯はメリッサじゃないような気がする」

夢でもメリッサの顔を見たわけじゃない。でも、ヒマワリっぽい部屋の、太陽に憧れていた女の子のイメージじゃなかった。それに、時計に挟まれていた血だらけの紙。

イギリスから調査員は二人いた。セシルと言う女性とアンドリュ―と言う男性だった。

「初めまして。一応、日本語、話せますね」

「二人とも、ここでは僕のことには渋谷一也で通している。間違っても、オリヴァーやデイヴィス博士と呼ぶな」

「分かりました」

「とりあえず原さん、麻衣とぼーさんと一緒に見回りをお願いできますか？ 麻衣は夢を思い出して、あの部屋がどの辺りか

大体の見当をつけてくれ。安原さんはアンドリュ―と一緒に聞き込みをお願いします」

「アタシとジョンはどうするのよ？」

「ジョンはここに残ってくれ。勘違いさせたままの方が都合はいい。それと、こっちで寝泊りしていた人達は、ツアー終了後に向こうに移ってもらった。松崎さんは使える樹がないかどうかセシルと一緒に見に行つて下さい」

「分かったわ」

「分かりましたぞす」

真砂子とぼーさんと一緒に城内を回っていると、イギリスメンバ―の話になった。

「そう言えば、安原さんに誰か付けるのって珍しいよね」

「言われてみればそうだな」

「アンドリュ―さんと言う方は、安原さんと同じような調査員だそ

うですわ。外で調べ物をするのが主な仕事だそうすわ」

「真砂子ってば詳しいね」

「麻衣や松崎さんがツアーの謎解きに参加されている間に、もう一人のセシルさんからお聞きしたんですわ」

「真砂子が会ったばかりの女の人と仲良くなるなんて珍しいね。それで、セシルさんは？」

「霊媒師だそうすわ」

「同じ系統だから気が合ったってことか？」

「違いますわ。……あのセシルさんって方、今年で四十歳だそうすわ」

「ほんとに!!!」

真砂子の言葉に、あたしとぼーさんは驚いた。道理で、ナルに色目使ったりとかしないわけだ。などと考えていると、ぼーさんも自分より十歳年上のセシルさんを思い出しているみたいだった。

真砂子が一つの部屋の前で止まった。

「麻衣、滝川さん。この部屋が一番強く気配を感じますわ。何だか様子を伺っているみたいですよ。……それに、ひどく脅えていらっしやるみたい」

「そうなのか？」

「恨みと言うよりも恐怖ですわね」

「麻衣はどうだ？」

「そうだね。そんな感じはする。夢で見たのも大体この辺りの部屋に間違いないと思う」

「とりあえず、この部屋に入って平気なのは夜だけらしいからな。今は、とりあえず札を貼っておこう」

ベースに戻ったら、綾子とセシルさんが帰って来ていて、城の敷地内に使える樹があるけれど、建物から遠すぎると言うことだった。

「とりあえず、あることはあったんですね」

「まあね。呼び寄せて浄霊できないほどじゃないけどね」

「原さん。報告をお願いします」

真砂子は先ほどの霊視の内容をナルに伝えた。それからあたし達は、安原さん達が戻って来るまで詩の暗号を解くことになった。

「一行目は向こうの館で見た絵のことで間違いないだろう。日光アレルギーと言う麻衣の夢が本当なら、二行目も意味が通じる。五行目と六行目に登場する太陽と言うのは恐らくヒマワリを表しているんだろう」

「それだと、三行目と四行目は謎だな」

「そやったら、真実を消されたと言うてはるんやったら、麻衣さんがこっちの建物に移った時に言うてはったように、ほんまはメリッサさんが犯人やないと言うことではおまへんか？」

「なるほど。ジョンの言うとおりなら、メリッサは何かの犯人にされていると言うこともかもしれないな。つまり真実に辿り着ければ称賛が与えられ、辿り着けなければ死が待っていると言うことだ」

「それって、殺されるってこと？」

「あの部屋に入らなければ大丈夫だと思うが……。あのメモはメリッサの書いたもので、彼女はその真実の犯人に殺されたのかもしれない」

様子を見るために、その日の夜は結局あの部屋に入らず、部屋のすぐ外にカメラを設置した。

部屋は一人部屋になり、あたしはその日の夜、夢を見た。

あたしは外国人の女の子になっていた。窓のない部屋に、ヒマワリがいつぱいの部屋の中で、ロウソクの灯りを頼りに本を読んでいた。それは、あの絵に描かれていた子供が持っていたエンデュミオンと言うタイトルの本だった。

あーあ。セレネみたいに夜にだけ会える王子様がいたら、私も恋ができるのに

太陽の下に出られない以外は普通の女の子なのだ。運動は好きではなかったから、外で思いっきり遊びたいなんてことは考えなかったけれど、歳相応に恋はしてみたかった。

そんな彼女は、いつしか恋をした。自分の世話をしてくれて、夜

になると外に出してくる使用人だった。

アーサー。私、あなたが好きよ

そんな、恐れ多いです

アーサーは私が嫌いなの？

そのようなことはありません。……メリッサ様を愛しておりますそれから二人は程なくして結婚した。だけど、その少し前からお城の近くで人が亡くなる事件が多発した。捜査の手は、城内にも伸びたが、貴族に手を出せず捜査は暗礁に乗り上げてしまった。

結婚から数年経ったある日のこと。メリッサは夜になって夫の部屋を訪ねた。すると、夫の姿が見当たらない。不思議に思い、外を覗くとアーサーが外から隠れるようにして帰ってくる様子が見えた。ねえ。こんな時間までどこに行ってたの？

何のことだい？

嘘を吐かないで。私見たのよ。あなたがお城の外から帰って来るのを

何てことだ！ メリッサ。君は僕が浮気をしていると疑っているのかい？

そうじゃないわ。ただ、どうしてなのか聞いているだけじゃない結局この日は詳しいことは聞けなかった。それからしばらくして、メリッサは黒い布を全身に纏い、太陽光に当たらないようにして昼間に部屋の外に出た。

夫の行動に疑問を持ったメリッサは、夫の秘密を探ることにしたのだ。

見つからないわね……

その時、メリッサは剣を見つけた。何気に手に取って、鞘から抜くと、わずかながら血が付いていた。

これは……

いけない人だね。それを見てしまうなんて

アーサー！ これは一体、どう言っことなの？

見ての通りさ

メリッサは全身が震えた。夫のアーサーがこの近隣の殺人犯だったのだ。

太陽の下であると言うのも構わず、メリッサは逃げた。黒い布を全身に纏っているせいで動きにくかったけれど、隣の建物までどうにか逃げた。

彼はきつと、私の財産が目当てだったんだわ

少し当たってしまった太陽のせいで、顔が痛かった。先ほど触れてしまった剣に付いていた血はまだ濡れていた。メモを書いて柱時計の中に隠した。

夫の足音が自分の近付いていた。

「麻衣！ カットして！」

ジーンの声が聞こえた。メリッサはきつと殺されたんだ。殺人犯と言う汚名を着せられて。

「……メリッサさんが犯人じゃなかったんだね」

「彼女はこの城の、あの部屋に捕らえられているだけなんだ。メリッサの夫は、メリッサの死後、すぐに事故死した。だけど、死後もメリッサの霊を城に閉じ込め、うっかり日中にあの部屋に入ってしまった人達を殺している」

「やっぱり、あの部屋がきつかけなんだね」

「あのアーサーって男は本当にメリッサを愛してたんだよ。だけど、自分の妻が太陽の下に出られないのに、太陽の下でのびのびと動く人達を見て憎悪が増したんだ。メリッサの部屋に太陽の光が入るとアーサーが目を覚ますんだ」

「あの春の絵の中の本は？」

「あれは、メリッサが子供の頃に、せめて絵の中だけでも太陽の下にさせたいと願い、両親が描かせた物だよ。エンデュミオンは彼女の愛読書だったんだ」

「……どうやったら解決できるかな？」

「あの部屋はメリッサの想いの方が強い。彼女を説得することができれば、何とかなるかもしれない」

「あのアーサーって人、浄霊は難しいかな？」

「それは分からないけど、とにかく、メリッサを先にどうにかしてそれと、日中、部屋に入るなら、入り口を黒い布で覆って光が入らないようにした方がいい」

「……昼間入っても平気なの？」

「日光が部屋の中に入らないように気を付ければね」

「分かった」

あたしが目を覚まそうとすると、ジーンがこう言った。

「麻衣。ナルをよろしくね」

そう言われて、不意に大晦日の時のことを思い出した。

「ねえ、大晦日の夜にカウントダウンの時キスしたのって、本当にジーンなの？」

「うん。最初に最後だけだね。ナルを麻衣にあげる代わりにね」

ジーンその言葉に、あたしは苦笑してしまった。

「ジーン！ ナルのこと、返せって言っても返さないから！」

「ナルが聞いたら喜ぶよ」

「今言ったこと内緒にしてて！ じゃあ、ありがとう」

一月四日。八日目。あたしは今度こそ目を覚ました。ナルに夢の内容を伝えて、安原さん達にメリッサの夫について調べてもらった。「メリッサ・バートリー。かつて、この城を建てられた方の子孫だそうです。谷山さんの仰るとおり、太陽の光に当たると火傷する、いわゆる日光アレルギーだったらしく、彼女の代でお城を建てた方の一族は費えてしまっています。夫の名前はアーサー。結婚前の姓は分かりませんでした。婿養子になっています」

「この城の周辺で殺人事件があったと言うのは？」

「伝説まがいの話ですがありました。この城に住んでいた女城主が実は魔女で、生け贄を求めていたと言う話と、城主の夫の浮気相手を殺していたと言う二種類の話になっていました」

「つまり、若い女性が犠牲になっている率が高かったと言うことですか？」

「そうですね。今でもその話を戒めのために話しているそうです」
それから暗幕を用意してもらって、メリッサの部屋がある階を全
て暗幕で覆った。

「麻衣。こうすれば、昼間あの部屋に入っても平気なんだよな？」

「ジーンはそう言ったんだけどね」

「もしダメだったらどうするんですの？」

「そしたら、あのアーサーって霊に殺されちゃうね。死んだら、ジ
ーンが喜ぶかも……」

そんなことを呟いて、

「ひどいよ、麻衣」

ってジーンの声が聞こえたような気がした。

とりあえず真っ暗になったところで、ランプとロウソクの灯りを
点した。懐中電灯だと明るすぎるから。

「お邪魔します」

ぼーさん、真砂子、あたし、ナルの順で部屋に入った。

「麻衣。この部屋か？」

薄っすらと壁に残るヒマワリの絵が見えた。

「うん。間違いないよ。ここがメリッサさんの部屋だよ」

「それにしても、少し狭い部屋だな。四人も入るとギョウギョウだ
な」

「原さん。見えますか？」

「ええ。女の方の姿が見えますわ。とても脅えていらっしやいます
わ。……太陽の光を入れると、彼が起きてしまつと訴えていらっし
やいますわ」

「浄霊するのは可能ですか？」

「日中に部屋から出られないと仰っていますわ。それに、夜は逆に
夫が起きています」

「……日中と言うのは、アレルギーの関係か」

「そう仰っていますわ。幽霊になってからも何度か出ようとしたらし
いのですけれど、反応が現れてしまつそうですわ」

「ね、ね。じゃあ、誰かに憑依させて、黒い布で覆ってから移動すれば昏間でもこの部屋から出られるんじゃないの？」

あたしがそう言うと、ぼーさんとナルが溜め息を吐いた。

「それで、誰がそれをやるんですか？」

「えっと……。あたし？」

などと言ったら、ナルに叩かれた。

「いったー」

「バカかお前は」

「じゃあ、どうするの？ 幽霊の状態でもアレルギーが出るんだよ？」

「そうだけナル、どうすんだ？」

「人形を使う。それに、誰かに憑依させてもその人物に反応が出る場合がある。部屋から連れ出すために器が必要なら、別に人間である必要はない」

あたし達は、ナルの言葉に高校一年生の時の森下事件を思い出してしまった。

「一旦戻って、ここに適当な人形がないか聞いてみよう。なければ、別口に用意するしかないが」

暗幕はとりあえず、そのままにしておくことにした。

「どうでしたか？」

「人形に憑依させて、日中の内にメリツサを浄霊することにした。

アンドリユー。この屋敷の主人に適当な人形がないか聞いてくれ。

場合によっては壊れたりする場合があることも伝えてくれ」

「分かりました」

アンドリユーさんはそう言って出て行った。その様子を見ていて、イギリスメンバーは役立たずだって普段ナルが愚痴ていたけどそんなことないじゃんなどと思った。

「アンドリユーさんって、安原さんみたいに優秀みたいだよね」

「……アンドリユーは元新聞記者なんです。その情報収集能力を買われて、現場よりも情報担当を任されているんですよ」

セシルさんが答えてくれた。

「僕がこっちにいた時はまだ、彼はSPRに所属してなかったからな」

「あ、そうなんだ。でも、何でSPRに入ったんですか？」

「私が勧めたの。夫に私の仕事を理解してもらいたくて」

その言葉を聞いて、あたしは一瞬、思考が停止した。話を一緒に聞いていたぼーさん、安原さん、ジョン、真砂子、綾子も驚いていた。

「ご夫婦だったんですの！」

「でも、姓が違うじゃない？」

「仕事の時は、私は旧姓を使っていますので。アンドリューの方が年下なんです」

セシルさんの実年齢にも驚いたけど、まさか、アンドリューさんとセシルさんが夫婦だったとは。

「ぼくもさすがに驚きました」

「それはともかく、松崎さん、使える樹はあると仰ってましたね。」

メリッサの浄霊が済み次第、アーサーの霊を移動させて浄霊する」

一月五日。九日目。日中の内に人形にメリッサを憑依させて部屋を出たあたし達は、同じように暗くさせた部屋で真砂子による浄霊が成功した。

それから人形「ひとがた」を用意して、ぼーさんがアーサーの霊を誘き出した。

「つつしんで、かんじょうたてまつる、みやしろなきこのところに、こうりんちんざしたまいて、しんぐのはらいかずかずかず、たいらけく、やすらけく、きこしめして、ねがうところをかんこのうじゅなさしめたまえ

臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前」

綾子の浄霊は成功し、メリッサの部屋から樹の場所まで全力疾走したぼーさんは、疲れて地面に寝転んだ。建物周辺や近くにいた幽霊も全部ではないけれど浄霊できたみたいだった。

「ぼーさん。そんな所で寝たら風邪引くよ」

「……ちよ、ちよっと休ませてくれ」

「引き上げるぞ」

「俺は無視かよ」

「グダグダ言っていないで行くわよ」

「とりあえず、明日までカメラを置いて様子を見よう」

樹の側に置いてあったカメラを回収し、あたし達はベースに戻った。

まだ日が高かったので、久しぶりにちよっとのんびりできる。な
どと思つてたら、ナルにお茶を要求されたので、全員分を淹れた。

「そう言えばリンさんとナルはこのまま、こっちに残るんですか？」

「私は一度、家の方に寄つてから日本に帰ろうと思つてます。結局
新年に帰れませんでしたので」

「ナルは？」

「僕は一度帰っているから必要ない」

「……結局、オリヴァーさんとマークさんにはジョンが本物のデイ
ヴィス博士だつて思わせたまんまだったね」

「ま、最初に名前を語つたんだから、騙されたつて文句は言えない
だろうな」

「せやけど、嘘を吐いていたのは心苦しいどす」

「本人に頼まれて、身代わりをしたと思えばよろしいじゃありません
んか。ちゃんと、最初からジョン・ブラウンつて名乗つてらっしゃ
るんですから、完全な嘘ではありませんよ」

「安原さんの仰るとおりですわ。ブラウンさんは神父だと仰らなか
つただけで、人を騙したわけではありませんもの」

安原さんと真砂子の言葉に、ジョンは安心したようだった。

その日の夜。みんなはツアーの謎解きの話になった。綾子がリン
さんがずつと盗聴機で盗聴して部屋から出て来なかったとか、ぼー
さんそつちのけで安原さんがごんごん暗号を解いたとか、そんな話
にだった。

「でも、今回一番活躍したのは、ナルと麻衣のペアだろうな」

「そうでおますね」

「言われ見ればそうね」

「え？ 何で？」

「だって、ナルと麻衣は二種類の暗号を読み解いて、両方解決したじゃありません」

真砂子の言葉に、あたしはちょっと照れてしまった。

明日にはイギリスを離れる。たった十日とは言え、ナルとジーン
の故郷に来れたことが嬉しかった。

「風邪を引くぞ」

廊下で月を眺めていたら、ナルが声を掛けてきた。

「いっぱい着込んでるから大丈夫」

「どうだか」

「……ナルとジーンは、このイギリスで育ったんだよね？」

「厳密に言えば、出身地はアメリカなんだが」

「それでも、イギリスの方が思い出がいっぱいあるでしょ。ツアー
がきっかけだったけど、イギリスに来て嬉しかった」

「じゃあ、次に来るのは被験者か、それとも僕の」

小さく呟いたナルの声は、あたしにだけ聞こえた。

イギリス最後の夜。あたしはこれまでにないくらい、ナルを近くに
感じた。あたしと同じくらい、ナルがあたしを思ってくれるのが
嬉しかった。

ナルの部屋でそのまま寝てしまったあたし達の関係は、翌朝、み
んなにバレてしまった。

「僕の婚約者として来るか」

結婚なんてまだまだ先だと思うけど、とりあえず今は、ナルの傍
にいたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0220v/>

英国奇怪小旅行（イギリスミステリーツアー）

2011年8月4日03時21分発行